

## 高草木博代表理事の発言

第 340 回日本原水協常任理事会 1 日目で高草木博代表理事の発言について、いくつかの都道府県事務局長から文書として配布してほしいという要望があり、議事録から、ご本人の了解を得て文書を整理して送付します。

---

ロシアのウクライナ侵略から始まって、世界でも「大逆流」とも言える状況が続いています。一方、これに対してこの「大逆流」を跳ね返す力も生まれています。

私たちはこの「大逆流」はどうだったのか、そしてその「大逆流」とどうたたかい、どう克服しようとしているか、どこまで来ているかということをしっかりつかみながら前進することが大事だと感じます。

ウクライナの戦争の後、世界大会をよびかけた当時起こったことについて、特に核兵器をめぐってふりかえってみます。

まずアメリカが、2 月まで検討してきた核兵器の先制使用政策の見直しを、3 月に停止しました。つまりアメリカは核兵器の先制使用を維持することになりました。

そして、この大きな戦略的な変更が続いて、NATO の拡大強化についても世界にすごく動揺が走りました。それまで、東西の対立の中で中立の立場を取っていたスウェーデン、そしてフィンランドが相次いで中立から離れ、NATO への加盟を申請しました。このとき、私たちのところにも、スウェーデンから「歴史的に伝統を築いてきたスウェーデンの中立、ヨーロッパで中立を維持する政策を根底から覆すものだ」というすごい怒りのメールが届きました。ヨーロッパではそうした動きの中で、やがてスイスでも中立の再検討という動きにまで行きました。

また、この流れの中で、世界的な共通点に達したのが、軍事予算の 2 倍化という NATO の政策が当たり前のように登場してきて、脅威論の中でその全体を正当化しようという動きが起きました。まさにこれは「大逆流」だったと思います。

しかし世界というのはそう簡単にそういうものに飲み込まれていかないという点を一番明確にしてきたのが核兵器廃絶のたたかいではないかと思います。核兵器禁止条約第 1 回締約国会議を見ていれば皆さん感じたと思うのですが、まず小さい国が 50 を超え、調印国が 80 を超えて参加し、こういう流れの中で、核兵器をなくすことを恐れていないだけじゃなくて、ウクライナの戦争を抱える中部ヨーロッパのウィーンで会議を成功させているわけです。その中で私たちもやはり役割を果たしたし、反核運動が大事だということを確認しました。

私は、やはりその大きな流れが第 10 回 NPT 再検討会議では「爆発」したと思います。

“どこで「爆発」したんだ、最終文書ができなかったじゃないか”という声もあります。

でも NPT の仕組みは 1 カ国でも反対すれば最終文書はできません。逆にそこだけを見ても会議の全貌がわかるわけではありません。

問題はその「逆流」で、あたかも大国が対立すればまとまった見解ができない、軍縮が

できないのは当たり前であるかのような流れに対して、最終日にこの最終文書ができないのを聞いた瞬間に、会議に参加した国々に、参加者全てが「自分たちは、だったら本音を言いましょう」と発言が相次いだのです。

それは全部採択された後ですから、1分半ぐらいの間です。

非同盟はマレーシアが発言しました。第1委員会の議長をやったのはマレーシアですが、その発言は国を代表して世界大会にも何回か来られたイクラムさんです。その内容は非常にはっきりしています。「どんなに我慢をしなくちゃいけないものであろうと、我々は柔軟性を発揮して、会議をまとめるために建設的態度を取ってきた。それは核保有国の側も同じように建設的な態度を取ることを期待したからだ。しかし、討論を通じて、最後のこの1分に至るまで、核保有国はどの点においても一切建設的な態度は取らなかった。一方には核不拡散なり新しい課題、制約、責任まで押し付けて、一方では、原発の利用でも第4条を公然と無視する。そして、自らは何一つ第6条の任務を果たそうとしなかった。これが原因だ」と。

それから、彼はもう一つ、こういうことも言っています。

非同盟として、一步踏み出した態度だと思いますが、「核兵器禁止条約は、まさにこの核保有国が保有国としての責任を果たさないことが原動力になって生まれているんだ」と。

核保有国がそういう態度を取る限り、世界が一致して核兵器禁止条約を支持してほしいのだと、非同盟の側から裏付けた発言だったと思いました。

わずか1分半の発言ですよ。そしてその中で、もう一つ彼は、今まであまり言っていないことを言っています。「残念なことは、この核保有国と同じように、非核保有国でありながら核の軍事同盟を結んでいる国々が極めて事態を複雑にさせていることだ」と。これは日本やNATO諸国です。これについても公然と批判をおこないました。

そして、最終日の雰囲気もあると思いますが、「この流れのままを許してはならない。来年から始まる次のNPTのプロセスでは、もう2015年に起こったようにやはり核兵器廃絶の大攻勢をかけなくちゃいけない。グズグズしてはダメな問題だ」と、非常に迫力のあるスピーチでした。

それから、新アジェンダ連合からは、エジプトが非常に明確に、「今回の決裂の明確な責任は核保有国の側にあり、それが最終文書そのものの意欲の低下に反映していた」と指摘しています。

その他いくつかありますけれども、キリバスという太平洋の小さな国がカザフスタンと一緒に起こった勇気あるスピーチについても触れたいと思います。「核を持つ5つの国は、現在ではなくて、過去におこなったことも現在おこなっていることもその全てにわたって責任を取るべきである」、すなわち核実験被害のことを言っているのです。そして、「だから我々は核兵器禁止条約を作った国々の皆さんに感謝したい」という発言をしています。私はこれら最終日の発言について、核保有国は動かなかつたにしても、世界の反応は、新しいこの「大逆流」を跳ね返す、大きな流れを作り出しているなとつくづく感じました。

最後に、沖縄での県知事選挙での玉城デニー知事の再選を勝ち取ったことについてです。ここにもやはり、「オール沖縄」、保守も含め、この日本と東アジアをめぐる「大逆流」を跳ね返す大きな流れがありました。今回の沖縄県知事選でのこういった跳ね返す側の大きな流れを、日本全体の確信にしていかなければならないと思います。